



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Decording Women's Voices : Independence and Dependence in WWII Literature through Digital Humanities
Author(s)	ススロフ, アルテム
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第16968号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k16968
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99812
Type	doctoral thesis
File Information	Artem_Suslov_summary.pdf, 全文の要約



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称: 博士(文学)

氏名: SUSLOV ARTEM

学位論文題名

Decoding Women's Voices:

Independence and Dependence in WWII Literature through Digital Humanities

(女性たちの声を聴く:

人文情報学が奏でる第二次世界大戦文学の自律と他律の音楽)

・本論文の観点と方法

本博士学位申請論文は、第二次世界大戦を経験した3カ国の女性作家たちの表現方法の類似点と差異を明らかにするという観点から、言語資料のデータ処理（コーパス分析）を施す方法を採用している。具体的には、既存の精読批評（Close Reading）と人文情報学（Digital Humanities : DH 批評）、つまり計算機を用いた言語処理技術の一つで情報抽出の一分野である「固有表現抽出（Named Entity Recognition, NER 手法）」および「感情分析（Sentiment Analysis, SA 手法）」を用いる。まず NER 手法を用いてナラティブ内のジェンダーの特色を類型化し、SA 手法によって感情表出具合を検証、男性中心的な戦争文学における女性作家の特徴を示す2つのパターン、すなわち脱男性化（demasculinization）と感情抑制（sentiment protection）の存在を明らかにする。それをさらに精査し、異なる社会の制約の下にある女性たちの戦争作品が、それぞれが伝統的ジェンダー規範に抵抗していることを指摘し、にもかかわらず自律と他律、抵抗と妥協といった対照的な表現方法を駆使していることを指摘している。

・本論文の内容

第二次世界大戦を経験した英国・日本・ソ連の女性作家たちは脱男性化と感情抑制といった共通したアプローチを取りながらも、それぞれの国の独自の文学的伝統や国家的イデオロギーの中で異なるジェンダー表象を試み、男性的な記述の規範から一貫して逸脱を試みている。英国では、女性作家は女性登場人物を中心に据え、その感情を抑制する物語を展開する一方、男性作家の作品は男性中心の構造を維持している。日本の原爆経験を扱った文学作品では、感情抑制はむしろ男性作家に多く見られる。ソ連では、共産主義的集団主義の制約下において、国家によって構築された女性像を通じて感情の抑制を用い、女性作家の声は控えめである。

このように、3カ国の女性の戦争文学作品はジェンダーのステレオタイプに抗いながらも、女性は自律と他律を迫られながら表現している。この傾向は、人文情報学批評と精読批評、すなわちコーパスを用いた定量分析とフェミニスト文学批評を統合することで確認できる。

第1章では、まず英国・日本・ソ連における男性主流の戦争文学が、女性を周縁化し、男性作家と戦闘中心の物語を優先してきたことを明らかにする。各国の伝統的批評を検討し、「兵士＝詩人」という神話や社会主義イデオロギーが、女性作家が排除されてきた点を挙げる。これに代わり、ジェンダーに重きを置いた DH 批評を活用すると、女性の戦争文学はトラウマをジェンダー化していることがわかる。女性作家は戦争の暴力と自己喪失の危機に対して、感情の抑制を維持し、女性の経験を中心に据える物語戦略を生み出している。

第2章では、方法論を提示する。具体的には、「脱男性化」と「感情抑制」の検出手段として、NER と SA を導入する。19 世紀のナラトロジー（文体計量学）やロシア・フォルマリズムから、モレッティ

の速読技法 (Distant Reading)、そして機械学習手法の一つである現代の深層学習 (Deep Learning) に至るまでの計算文学研究 (Computational Literary Studies) の歴史的展開を概観し、DH 批評を本論の中核に据える。NER は多言語を対象にした言語資料 (コーパス) における登場人物のジェンダー的特色を、SA は物語内の感情分布 (感情抑制) を分析するのに役立つ。これらの分析は、多言語で綴られた戦争文学作品を公平に解釈することを可能にし、抑圧された主体性を可視化することができる。

第3章では、英国の195編の短編小説のコーパスを作成し、女性作家たちの戦争を考察する。まず、戦時小説を文学史及びジェンダー的文脈で見ると、女性作家は感情を遮断し女性中心の語りを客観的に用いることで、戦争の衝撃を緩和している。だが、NER と SA を用いたジェンダー分布と感情トーンの比較分析すると、NER の結果からは、女性作家による物語では登場人物の50%以上が女性で構成されている一方で、男性作家の作品は男性中心であることが確認される。また、SA では、女性作家が否定的感情を登場人物ではなく語り手に担わせることで、女性を保護する傾向が強く見られる。

第4章では、日本の原爆文学作品127編にNERとSAを適用した結果、ケアや感情表現がジェンダーの境界を越えていることが判明する。日本の女性作家は女性中心の物語を描いてはいるものの、その物語世界はしばしば男性的な視点や構造に支配されており、ステレオタイプ上「女性的」とされる感情抑制の傾向は、むしろ男性作家に強く見られることが明らかとなる。男性は(女性的とされる)ケア提供者として描かれ、対照的に女性はケア受益者になる傾向が見られる。また、被爆女性は男性より感情抑制がなく、トラウマの影響の複雑さがうかがえる。原爆体験を綴る文学作品はこうして従来のジェンダー役割を溶解させ、ケアと感情的レジリエンス(復元力・弾力性)が戦争という集団的経験のなかで回復する様子を描き出している。

第5章では、ソ連人女性作家による213の文学作品をコーパス分析した結果、女性作家たちがスターリン体制下の文学的カノンにおいて、プロパガンダと文学的周縁化という二重の圧力を乗り越える様子が明らかになる。結果、ソ連の作品は伝統的な役割を強化する傾向が顕著であり、女性中心の物語ではケアや感情的レジリエンスが強調され、感情抑制は従来の女性性と強く結びついている。ジャーナル・コーパスに対するデジタル分析を行うと女性の連帯や労働に基づく解放的空間を描いたものもある。さらに「感情分析」では、女性作家の作品は男性よりも高い感情抑制を示している一方で、男女ともに社会主義リアリズムが求める「感情を抑え、イデオロギー的に高揚させる」物語構造に従っていることが明らかとなっている。

第6章では、戦争文学をジェンダーの観点から比較分析するための、利用範囲の広い新たな「ツールキット」を提案している。女性による戦争文学は、センサーシップ、イデオロギー、ジェンダー規範、そして個人のトラウマといった複数の要因によって構造化されたスペクトル上に存在しており、概念の一般化や普遍化はむずかしい。だが、このツールキットは3段階(資料収集、解析、解釈)からなる分析手法をまとめたもので、従来の解釈では見過ごされがちな感情や登場人物の配置の潜在的な構造を明らかにするために、デジタル手法と文学的分析結果を比較できるようにしている。このことは、NER と SA を用いた分析により、女性登場人物に与えた主体性や感情的レジリエンスの度合いを可視化できることを証明している。

結論としては、精読批評と人文情報学を同時に利用することが、女性文学の複合的理解に極めて有効であることを論じまとめている。英国文学は比較的緩やかな検閲の下で女性化と感情抑制の度合いが最も高く、日本の原爆文学では伝統的役割や感傷性への抵抗が見られる。ソ連文学では母性的アーキタイプを強調しつつ、一定の感情的抑制も伴っている。これらの差異は、社会及び自己検閲、社会的要望、物語的妥協といった構造の中で解釈される。そして、三つの国の戦争を描く中で、女性作家はさまざまなステレオタイプや社会的国家的要請に抗いながら、自律と他律のあいだで自らの声を奏でていることを再確認している。